

書評

ジョン・G・ゲイジャー編（志内一興訳）

『古代世界の呪詛板と呪縛呪文』

（京都大学学術出版会、二〇一五年）

大谷 哲

一

本書は古代ギリシア・ローマ世界における「呪い」に用いられた呪詛板ならびに呪縛呪文を記した史料一六八点の翻訳と、その解説、関連文献を系統だてて紹介した John G. Gager, *Curse Tablets and Binding Spells from the Ancient World*, Oxford University Press, 1992 の全訳である。古代ギリシア・ローマ世界で実践された呪いに関する研究では必ず言及される原著の翻訳として、またこのテーマに関し一般的に論じた、日本語で読むことのできる希少な文献として、当時の人々の精神世界を把握するため

の必読書である。以下、本書の構成を踏まえた上で、本書の内容を紹介し、本書がもたらす利点と必読である理由を説明したい。

二

本書の原著は、初期キリスト教、とりわけパウロ神学における「異邦人」の位置づけ、ならびに「異教」世界におけるユダヤ・キリスト教の存在を研究し、ながらくプリンストン大学（米）で教鞭をとったジョン・ゲイジャー（現同大名誉教授）が編んだものである。ゲイジャーの他、二〇一六年現在では英米の大学で活躍しているキャサリン・F・クーパー、デイヴィット・フランクファーター、デーレク・クリューガー、リチャード・リムが寄稿者として名を連ねている。元来寄稿者各自が担当史料の翻訳と注記執筆をおこなっていたが、それを改める形で、全員で訳文・注記を作成し上梓したため、全体の編者であるゲイジャーの著作として扱うのが一般的となっている。

本書の構成は以下のようになっている。

序章
第一章 競技呪詛板―劇場や競走場
第二章 性愛の呪詛板―セックス、愛、そして結婚

第三章 訴訟・政争―「法廷で舌が麻痺しますように!」

第四章 ビジネス、商店、酒場での呪詛板

第五章 正義と復讐を求める嘆願呪詛板

第六章 その他の呪詛板

第七章 護符、解毒呪文、対抗呪文

第八章 文学史料、碑文史料の証言

特殊用語解説／訳者あとがき／本文註／索引

序章には以下のように、細かな節題が設けられている(呪詛板の素材／呪詛板に記されたメッセージ／神々、精霊たち、死者の靈魂／人形、髪の毛、釘―呪詛板の付属品／呪詛板の安置／呪詛板の追求する効果／呪詛板は効果があつたのか／呪詛板と法律との関係／「魔術」と「宗教」／ギリシア・ローマ時代以前および以後における呪詛)。この章は、本書が扱う呪詛板、ラテン語でデフィクシオネス、ギリシア語でカタデスモイと呼ばれる、現在一五〇〇例以上出土している古代の呪術用具の基礎的な情報と、本書がそれをどのように解釈する方針であるのかを読者に示す。

著者ゲイジャーは、呪詛板研究者デイヴィッド・R・ジョーダンに従い、呪詛板をひとまずこのように定義する。「他の人間や動物に対して影響を及ぼしてもらうおうと、超自然的な力を招来するために用意された、たいていが小さくて薄いシート状の、文字の刻まれた鉛の薄片」(三

頁)。もちろん、陶片オステラや石灰石、パピルスなども支持体となり得たが、おそらく廉価で入手しやすく、成形も容易で、冷たさや重さといった冥界をイメージさせる質感という理由で、現存する呪詛板は大半が鉛製である。こうした支持体に刻まれるのは、時代・地域による発展や変化はあるものの、神や精霊の名前、訴えかける言葉、そしてその言葉自体に超自然的効果があると期待される「神秘的文言」ウガズ、ミステガエ、カラクテレス、さらには人間や動物、神々の図像や占星術的な象徴記号などである。さらに、刻まれた文言が効果を持つよう、その書かれ方が回文になっていたり、通常とは異なり右から左、下から上へと文字が配置されたりもする。こうした文字を刻むことを生業とする専門家が存在したこと、式文の例文集や、依頼主の名前などを入れれば使用できる「テンプレート」すらあったことも、古代の呪詛を知るうえで重要である。こうして作成された呪詛板は、効果を高めるため、つまり「呪縛」の力を強めるために、鉛板自体が丸められ、折りたたまれ、そして釘で封がされた。さらに呪詛板にはしばしば人形や対象者の髪の毛などが添えられる。これらもまた、効果を高めるための付属品であった。これらの品々は、呪詛が超自然的な力の發揮を呼びかける、冥界の神々や死者の近く、すなわち墓地や、また呪詛対象の近くに埋められるなどして安置され、対象者の行動・精神・肉体を

文字通り「縛り上げ」呪縛する効果が期待された。

著者はこの序章で、極めて重要な問いかけを行っている。すなわち、「呪詛板は効果があったのか」。そして、現代人にとっては明白に非合理的に思えるこの問いに、確信をもって、バース出土の呪詛板を研究したロジャー・トムリンの見解をひきつつこう答えている。「バースで二世紀にわたり呪いを記すという営為が続いたということは……それが効果があつたことを暗に示している。あるいは効果があると信じられていた。そしておそらく、この信頼の正しさは証明されたのだ」(三三―三四頁)。もちろん、トムリン、そしてゲイジャーが述べているのは、呪詛が文字通り超自然的な力を発揮したという意味ではない。効果があつた、あるいは効果があると信じられていた、「この両者は結局、意味するところは同じだ」と著者は述べる。呪詛の使用は、なんらかの力にすぎり自らを救済せねばならない事態に陥った古代人に、しかも他に有効な手段が存在しない古代人に、耐え難い緊張状態を取り除き、なんらかの手段に訴えたという気分転換をもたらしたというのが著者の想定である。文化人類学者エヴァンズ・プリチャードが述べたように、個人の不運を説明し、共同体の失敗を免じるとき、呪いは格好の役割を果たしたのである。

このように、呪詛板や呪文の効力を共同体が共通して前

提している社会において、法は呪詛をどのように扱ったか。ギリシア・ローマ社会は、法によってこれを禁じた。社会階層の上下を問わず、呪詛は影響をもたらした。その「有効性」ゆえに、古代社会の法・社会・政治的中心からのコントロールを逸脱する呪詛は、支配する側にとって、危険な存在だったのである。しかし、呪詛板の隆盛は決して終わらなかつた。

このように、社会のすみずみまで行きわたっていた呪詛の使用と効力への信用から、著者は本書において「魔術」という用語の使用を避けることを提案する。古代ギリシア・ローマにおける呪詛研究がかつてないがしろにされてきた背景に、著者は「宗教」と対置される、あるいは「宗教」の墮落形態とされる「魔術」に呪詛や呪文の使用を押し込め、無知で教養の無い人々だけがそこに留まっていた発育不全状況としての迷信と切つ捨てた、発展段階的な心性史理解を読み取る。しかし、右に見たように、こうした呪詛理解は、ギリシア・ローマ社会に生きた人々の精神史を見誤っている。実際には、ありとあらゆる人が呪詛の対象となることを恐れ、ありとあらゆる人が呪詛を用いる事態となる可能性を持っていた。そしてそれは、ユダヤ・キリスト教の教えを受け入れた人々の間でも、数世紀間変わることなく続いたのである。

第一章から第六章までは、著者の分類に従い、実際の呪詛板のテキストを見ていくことになる。各章ごとに、その章であつかわれる呪詛板の定義と解説があり、そして呪詛板のテキスト翻訳、さらに、文字の配置や図像の理解に必要な場合は呪詛板の写真やスケッチが添えられる。

第一章では、円形闘技場で戦う格闘家、劇場やコンテストで競い合う合唱隊、そしてローマ人を熱狂させた戦車競走のライバル(御者も、馬たちも)を狙った競技呪詛が提示される。興味深いことに、しばしばこの呪詛板は、競技場のレース場の土中から発見されている。競技者、レースチームの関係者、そして自らの稼ぎを賭けに託した観客：呪詛ほど彼らが頼りにしたものは無いかのように思えてくる。第二章では、セックスや愛、結婚にまつわる性愛呪詛が取り扱われる。これは、意中の相手を自らのものにしようとする呪詛に留まらない。いついかなる時も、恋に悩む人間はライバルの影におびえるものらしく、他者を魅惑しようとする「誘引呪文」と同じく、恋敵を呪いかツプルの仲を裂こうとする「別離呪文」の例も多い。こうした呪文で達成されようとするものが、かつての研究史で「愛の呪文」と単純に呼ばれ、イメージされていたものだけではないことも、著者は見落とさない。呪詛使用者たちが刻んだあからさまな文言からは、完全に情事のみを求める例も少

なくない。そして、追い求める相手も、性別によらず、既婚・未婚によらず、あらゆる性愛の悩みに呪詛板は対応し、そして満足できる効果が手に入らずとも、使用され続けた。そこには何の不思議もない。ライバル(既知であろうとなかろうと)もまた、呪詛の力で対抗しているかも知れないのだから。

第三章で扱われるのは、訴訟・政争に関する呪詛である。ギリシア・ローマ社会において、特に都市国家社会を構成する市民たる者は、紛争にあたっては同胞市民の前で雄弁をもって自らの立場を語り、政治においても司法においてもその問題を解決してきたと言われてきた。しかし同時に、敵対者が法廷で、あるいは民会会場で、超自然の力によって舌を縛られ、思考を止められ、自らに有利な状況が生み出されるよう、人々は必死に呪詛の力を頼った。紛争という大きなストレスがかかる状況にあつて、呪詛を頼り、敵の呪詛を恐れぬ者はいなかった。第四章では呪詛の戦いが、ビジネスや商店、酒場での争いに用いられる。競合する業者や店舗、職人：呪詛によって牽制し、排除すべき存在は市民社会に溢れていた。さらに、陶工のような仕事の失敗の可能性が高い職業では、焼成作業の危険を排除するための呪詛も使用されていた。商売人として、職人として、取るべき正しい技術的・経済的選択の傍らに、呪詛は寄り添っ

ていた。

第五章は、いささか特殊な区分である、「正義と復讐を求め」呪詛を扱う。この章で扱われるのは、浴場など様々な場所で盗まれた品々を何らかの神格の所有に委ね、その神格の所有物であるのだからその品を取り返すよう、そして盗人に復讐を行い罰するようこいねがう呪詛である。もしその結果盗品が返却された場合は、御札の供物を捧げて神格から品物を再び譲り受けたり、盗品の一部を神格から頂戴したりする、という儀礼的な手続きが取られる。こうした呪詛類型は、自力救済的で、司法手続きが未整備な古代社会にあつて、裁判に訴え出ることの難しい、あるいは訴え出ても効果が期待できない力なき個人を救済するためシステムの存在を示している。同時に著者は、神々に正義と復讐が訴え出られたことは対面社会としての古代共同体に知れ渡り、実際に盗品を返却するべき動機が盗人に発生する可能性を指摘している。

右に列挙した区分に収まらない、あるいは判別不可能な事例が、第六章「その他の呪詛板」で扱われる。呪詛を使用した動機や状況は判然としないものの、多様な呪詛の文言がここでも提示される。

第七章は、これまで示された呪詛に対して自らを護る、「護符、解毒呪文、対抗呪文」を扱う。著者は、あらゆる

史苑（第七六卷第二号）

人が呪詛の対象となることを恐れる社会にあつて、この社会で生きていくことを可能にしたものこそ、呪詛を無効化し、それに対抗してくれる呪詛・護符の存在であったと論じる。そして、第八章では、古代世界のいたるところで呪詛が使用されていたことを示す、文学史料、碑文史料が提示される。第七章までに見てきた呪詛の使用は、古代ギリシア・ローマ世界を研究してきた者たちが日々目にしてきた史料にも、あまねく存在していたのである。

本書本書はこれらの章の後に、「特殊用語解説」を設けている。呪詛中に登場する「神秘的文言」^{ウオラス、ミステラガエ}や神格・精霊等は、史料引用ではカタカナで提示されている。この特殊用語解説を参照しながら読むことで、難解な呪詛板テキストの理解が深まり、この解説は非常に貴重である。加えて訳者あとがきでは、本書の解説とともに、原著が刊行されるに至るまでの、関連する古代地中海史研究の経緯も極めて平易に説明されている。

三

以上、本書の構成・内容を順に紹介してきた。前述の序章、解説、史料翻訳を通じて、本書の読者は古代ギリシア・ローマ世界の研究史において、かつて等閑視されてきたもう一

つの精神史を目の当たりにすることだろう。古代世界において、呪詛は社会階層の上下を問わず、人々の心を縛り続けてきた存在であった。著者が引用する紀元後のローマの博物学者、大プリニウスが述べている通り、「呪詛板によって呪縛されることを恐れない人はいない」のである(三〇八頁)。そしてそれは、例えばユダヤ・キリスト教のような、いわゆる「一神教」を信じたとされる人々においても変わらない。本書が示した、呪詛に頼り呪詛を恐れる古代人の心性を把握してこそ、政治・宗教をはじめとするあらゆる古代史研究は盤石なものとなる。繰り返しになるが、本書で示されたように、それは古代人のあらゆる生活場面に関係していた。もっとも、本書の分類法には、再考の余地もある。たとえばNo.五五は人名のみが残る呪詛板で発見地も不明であるが、呪詛対象者に「ソクラテス」とあるだけで、訴訟・政争呪詛板と分類されている(一六七―一八頁)。かの自死を強いられた哲学者とその仲間に対する呪詛の可能性はあるが、その同定を確証するためには(著者も断定はできていない)、併記される数人の人名をもより精査し、呪詛対象者の「党派」を論じる必要があるだろう。また、例示用に出された史料がギリシア語のものに偏っているように思われる。一三五例提示される呪詛のうち、ラテン語のものは二〇例に満たない。これは史料の全体的傾向

に即してのことなのか、そうであるならば、その傾向の理由説明が必要ではないか。さらに「神秘的文言」^{ウオケス・ミステイカエ}におけるヘブライ語やエジプト地方伝統の重要性を思うならば、アラム語・コプト語の提示がさらにあることが望ましかった。しかし、「古典文献」を中心として築き上げられた、理性溢れる古代社会像に修正を迫ったという本書原著の役割を思えば、それは欲張りな要求というものかも知れない。

本書の原著が世に出た九〇年代以降、古代ギリシア・ローマにおける呪詛・呪文の研究は大いに進展した。本邦における研究を列挙するだけでも、以下のような成果がある。まず、ギリシアにおける呪いを主題とする真下英信の論文「古代ギリシアの呪い管見」(『慶應義塾女子高等学校研究紀要』二一号、二〇〇四年)、これに続き、古山正人「西洋古代における Curse Tablets ― 概観と訴訟・政争呪詛」(『國學院雑誌』一〇七―二二二号、二〇〇六年)、「西欧のアミュレットについて―古代ギリシア・ローマを中心に」(『國學院大學紀要』四六、二〇〇八年)が相次いで発表される(古山氏は本書翻訳の重要なアドバイザーとしてあとがきで触れられている)。キリスト教の立場からは、大貫隆が「グノーシスと異言(グロソソラリア)」(『宗教研究』八四―二、二〇一〇年)にて、後期グノーシス文書が受容した「呪文」を論じている。最新の出土呪詛板を日本の研究者が調

査する事例も出ている。前野弘志は「二〇一〇年ティール出土呪詛板」(平成二〇〇二三年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書(研究代表者:泉拓良)『フェニキア・カルタゴから見た古代の東地中海』、二〇一三年)にて最新の出土呪詛板についての詳細な分析・翻訳を試みている。同氏はその後、『ギリシア語魔術パピルス』を読む」(『西洋史学報』四二、二〇一五年)にて、パピルスに記された古代の呪術師たちの手引書(本書でも随所にPGMの略号で参照されている)の全体像を紹介している。また、訳者志内自身も、『正義を求める嘆願(Prayer for justice)呪詛板』の起源について「ローマ帝国西部の事例を中心に」(『西洋史研究』新輯四四、二〇一五年)にて、本書第五章で取り扱われる類型の史料群を分析している。

これらの研究成果を辿る際にも、やはり本書の論じた基礎的知識を押さえておくことは欠かせない。繰り返しになるが、本書は古代ギリシア・ローマ世界を学ぼうとするあらゆる者にとって、必読の書なのである。

(日本学術振興会特別研究員・本学兼任講師)